

<実践事例>

グローバル人材育成のための合宿型英語集中講義の実践と課題 —アンケート結果からの考察—

伊木 貴子¹

京都産業大学では、合宿型英語集中講義「特別英語（英語サマーキャンプ）」の2014年度から毎年度実施してきた。同科目は、外国語学部で開講されている理学部・コンピュータ理工学部・総合生命科学部の3学部協働のコース「グローバル・サイエンス・コース」の必修科目である。学部の枠を超えたコミュニティ形成と、英語に対する苦手意識を取り除きコミュニケーション能力の育成を図っている。この4年間で、本科目に関わる教職員が何度も協議を重ねて内容の改善を行い、新しい試みにも取り組んできた。主には、1) 最終課題であるプレゼンテーションのテーマ、2) 授業の実施場所、3) プレゼンテーション大会、4) 実施日程の4点について、検討と変更を重ねて内容の向上を図った。本稿は、履修者に実施した事後アンケートをもとに、本科目の実施内容を報告し、今後の課題について考察するものである。

キーワード：合宿型、英語集中講義、グローバル・サイエンス・コース、学部協働

1. はじめに

京都産業大学は、2012年度に「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に採択され、大学全体のグローバル化を推進してきた。グローバル社会で活躍する理系産業人を育成する「グローバル・サイエンス・コース（GSC）」は、グローバル化に関わる取組の1つであり、2014年度に理学部・コンピュータ理工学部・総合生命科学部の理系3学部のコースとして開設された。

「特別英語（英語サマーキャンプ）」は、GSCのプログラムの中でも外国語学部と協働している科目であり、科目設置前から試行を重ねるなど、特に力を入れてきたプログラムの1つである。2014年度に開講して以降、毎年履修学生を対象に事後アンケートを行い、科目実施前後には外国語学部と理系3学部の教員で内容を検討し毎年改善を図ってきた。プレゼンテーションの課題、実施場所、プレゼンテーション大会の内容、日程の4点において変更を加え、試行錯誤を重ねながら実施している。

本稿では、「特別英語（英語サマーキャンプ）」の内容に触れつつ、2014年度からの4年間の実施した中で改善したことや新たな試みを紹介する。また、履修学生に実施した事後アンケートをもとに、計画した内容が効果的であったか、あるいは

改善した点がどう学生に変化をもたらしたかについて考察し、今後の課題を考察する。

2. グローバル・サイエンス・コースについて

グローバル・サイエンス・コース（以下、GSC）は、平成26年度に京都産業大学の理系3学部（理学部・コンピュータ理工学部・総合生命科学部）に設置された、グローバル社会で活躍できる理系産業人を育てるコースである。同大学が2012年度に「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に採択され、外国語学部のイングリッシュキャリア専攻（以下、ECC）とともにグローバル化推進事業の中核を担ってきた。GSCの設置は、理系3学部と外国語学部のコラボレーションによる「特別英語（英語サマーキャンプ）」の科目を必修としていたこともあり、特色ある取組として評価され、採択に至ったと考えられる。

2.1. GSCのプログラム

GSCでは、理系3学部共通の必修科目は「特別英語（英語サマーキャンプ）」のみであり、それ以外のコース修了要件の科目は学部ごとに異なる。GSCは、1年次の春学期に選考を行い、7月のGSC登録を経て、9月に「特別英語（英語サマーキャンプ）」を全員履修する。同科目は、GSCの初顔

¹ 京都産業大学 教育支援研究開発センター

合わせであり、GSC のプログラムにおいて最も重要な科目の1つである。英語サマーキャンプを通じて他学部の学生と交流することで、学生間に学部の枠組みを超えたネットワークを構築し、GSC のコミュニティを形成している。GSC を3学部合同で行う意義の1つでもあり、その繋がりの中から GSC の自主勉強会（伊木 2016）や、GSC 全員の代表を務める GSC 学生リーダー会が発足した。

英語サマーキャンプ以外の科目は、理学部・コンピュータ理工学部・総合生命科学部それぞれで独自に設定している。英語を用いた専門科目や、外国語学部に設置されている英語サマーキャンプ以外の特別英語科目、キャリア形成のための科目など、様々な科目が必修科目あるいは選択必修科目として設定されている。各学部とも、所定の科目から 26 単位以上修得すれば、コースを修了することができる。また、4 年次には、英語で研究発表を行うことを想定してプログラムが作られており、平成 29 年度末に初めて GSC の 4 年次生が発表会を行う予定である。

また、修了要件となっている科目以外に、GSC では月次勉強会 (Monthly GSC) を実施している。月次勉強会では、グローバル社会で活躍している卒業生の体験談を聞く、海外の大学の教員を招いて海外事情を聞くなど、学生のグローバルマインド醸成のために様々な内容の勉強会を行っている。また、グループワークを伴うワークショップ形式の勉強会を開催したときは、英語サマーキャンプの学生ファシリテータ (3. 2. 3. で後述) が中心となり、様々な学部・学年が入り混じったグループのファシリテーションを率先して行い、勉強会を成功に導いた。

2.2. GSC と英語教育

平成 26 年度に GSC の 1 期生が登録され、その数は現在約 230 名となっている (平成 29 年 11 月末現在)。各学年に約 60 名の学生が在籍しており、各学部で設定されたカリキュラムに基づいてグローバル人材になるための学びを深めている。

GSC の学生は、外国語学部の専門教育科目「特別英語」科目を履修し、必要な英語力を伸ばしている。特別英語科目は、自身の学びの目的に応じて英語を学ぶことができ、留学の準備のための科目や、発音を学ぶ科目、多読の科目などがある。理系学生向けの科目もあり、特別英語科目は学生の多様なニーズにこたえている。

また、2015 年度より、GSC の学生が所属する理系 3 学部と、外国語学部の学生の 3・4 年次生を対象に TOEIC IP 試験を実施し、学生の英語力

の測定を行っている。受験料は大学が負担するため学生にとっても受験しやすく、教員側としても受験を勧めやすいといった利点がある。英語の必修科目がなくなる 3・4 年次に TOEIC IP を受験させることで、学生にとっては英語学習の目標となる地点が定められ、学習意欲が高まる学生もいる。

3. 英語サマーキャンプ

「特別英語 (英語サマーキャンプ)」は、外国語学部開講の GSC 必修科目であり、外国語学部の学生も履修可能な科目である。本科目の目的は、プレゼンテーションを英語で行うためのノウハウを身につけるだけでなく、英語に対して苦手意識を持っている学生が多い理系学部所属の GSC の学生に対し、英語の苦手意識を取り除くこと、また、学部を超えたコミュニティの形成を行うことを目指している。カリキュラムづくりの段階で、理系学部教員から「コミュニケーションに重きを置いた内容にしてほしい」という要望があり、英語の 4 技能の中でも会話能力を重視した内容となった。平成 25 年度の試行を経て、外国語学部教員と理系学部教員で検討を重ね、平成 26 年度から科目としてスタートした。平成 29 年度までに外国語学部と理系 3 学部で合わせて 278 名が履修しており、24 名が履修後に学生ファシリテータとして本科目に関わった。3 日間を通して学生は食事・休み時間も含めて英語で話さなければならず、期間中は教職員も学生の手本となるべく英語で話している。

また、終了後には学生に振り返りのアンケートをとり、自身がどう成長したか、どんな点が良かったと感じているか、プログラム全体を通じて気になったことなどを記載させている。集計したアンケートは、GSC の担当教員との振り返りで活用し、次年度の計画に役立てている。

3.1. プログラム内容

英語サマーキャンプは、学部協働の科目であり合宿型の 3 日間集中講義でもあることから、外国語学部と理系 3 学部の教員により詳細にプログラムが設計されている。

平成 25 年度の試行段階から、本科目は合宿形式での実施を念頭に内容を検討した。3 日間英語で話すという気持ちの切り替えをスムーズに行うため、大学から場所を移して合宿形式で行うのが良いという結論に至り、科目として立ち上がった平成 26 年度 (1 回目) は 2 泊 3 日の宿泊学習の形式

で行った。しかし、1回目の実施後の振り返りで、理系学生にとって外国語学部の学生とともに英語でずっと話すという心理的負担が大きく、理系教員より「実費とはいえ参加費用の11,000円(食費・宿泊費のみ)の金銭的負担も大きいのでは」という意見があったため、翌年度から1日目は大学で実施し、2日目以降を合宿形式で行うという方式に変更された。これにより、参加費を7,300円に抑えることが可能になり、履修しやすくなったと考えられる。また、1日目は学生が慣れ親しんだキャンパスで英語を学び2日目以降の合宿に気持ちを切り替える時間をもつことができたことも良い方向に働いた。

初日は、履修者全員を学部に関係なく英語力別に4クラスに分け、アイスブレイクを兼ねた自己紹介を行い、講師が働きかけて英語で発言することを促す。履修者を約20名以下の少人数授業にすることで発言の機会を増やし、また、学生同士が仲良くなりお互いの名前と顔を覚えられるようにし、学部を超えたコミュニティの形成を図っている。次に、学生は事前に与えられたスピーチ原稿作成の課題を用いて、前に出て英語で話す練習をする。この事前課題は、開始と終了の挨拶をあらかじめ記載している穴埋め形式のワークシートである。そのため、英語の苦手な学生でも課題に取り組んで授業に臨むことができている。事前課題をもとに、まずは少人数(5名ほど)の聴衆を相手に話す練習をし、その後にクラス全員の前でスピーチを行って段階を踏むことで、内向的な学生でも取り組みやすいようにしている。昼食休憩を挟み、午後からは英会話とインタビュー調査結果の英語での発表という2つの目的をもったワークを実施する。個人で質問を作成し、その質問をもとに他の学生と雑談を交えつつ英会話をし(約60分)、結果をまとめてクラスで発表する(例:「週に何回SNSを利用しますか?」と質問し、「○%が5回以上と回答した」と発表するなど)。さらに英語での発話を促し、発表の練習もさせるなど、最終日に向けた下地づくりを行う。

最後に、最終日のプレゼンテーションのためのグループ編成を行い、課題を発表する。平成26年から2年間は「理想の科学の授業とは」というテーマで行ったが、平成28年度からは「日常にある大きな課題を解決する、小さいけれど、ユニークで、革新的な解決策の提案」というテーマに変更した。以前のテーマだと学生の発表内容が似通ってしまいプレゼンテーションの評価が難しいということと、専攻に関係なく議論できるテーマのほうが良いのではないかというGSC担当の理系教員の意

見をもとにテーマを変更した。

また、平成28年度より、1日目の最後に「日本語OK」の時間を設定した。これは、学生に言葉が通じることの良さを分かってもらうことや、「英語で言いたかったが言えなかったこと」の言い残しがないようにするためのものである。この時間を設けたことにより、学生は2日目以降に英語のみで話すことに集中できるようになり、また気持ちを切り替えることにも役立っていると考えられる。

2日目からは、学外の宿泊施設に移動し、学習環境を変えることで気持ちを切り替えて英語のみで話す雰囲気づくりをする。集合時の点呼から英語で学生と会話し、移動するバスの中での履修者同士の会話もすべて英語で行うよう指導する。また、英語しか話せない雰囲気となるよう、他の教職員も英語で話すことを推奨している。

宿泊施設に着いてからは、グループごとにプレゼンテーション大会の発表準備を行う。平成27年度は2泊3日で全日程を行ったが、平成28年度からは2日目と3日目を1泊2日の合宿形式にした。集合時から英語での会話を徹底し、移動中、到着後もすべて指示は英語で行った。

3日目は、午前中はプレゼンテーションのリハーサルを各グループで行い、午後のプレゼンテーション大会に備える。教員および学生ファシリテータはグループの発表を見て、声の大きさや話し方、説明の仕方についてアドバイスを送り、履修学生の練習に付き添う。

プレゼンテーション大会は、全参加者がすべてのポスターを見て回れるよう、また、1グループが複数回ポスター発表ができるよう、タイムテーブルを組んでいる。教員はすべてのグループの発表を審査したうえで評価をすることができるよう、2年目の実施からこのような形式になった。また、最後に表彰式を行っており、1位グループは理系教員が、特別賞グループは外国語学部教員と学生ファシリテータが選出しており、なるべく多くの学生に受賞の機会を与えるとともに、「英語が話せなくてもここまでできた」という自己肯定感を与える役割も果たしている。

終了後には履修者に対しアンケートを実施し、自身の学びを振り返ってもらうとともに、プログラム全体を通じて良かった点や気になった点を記入させている。このアンケートの集計結果も活用しながら、毎年プログラムに様々な変更点を加えることで、学生の満足度は年々高まっている(図1)。

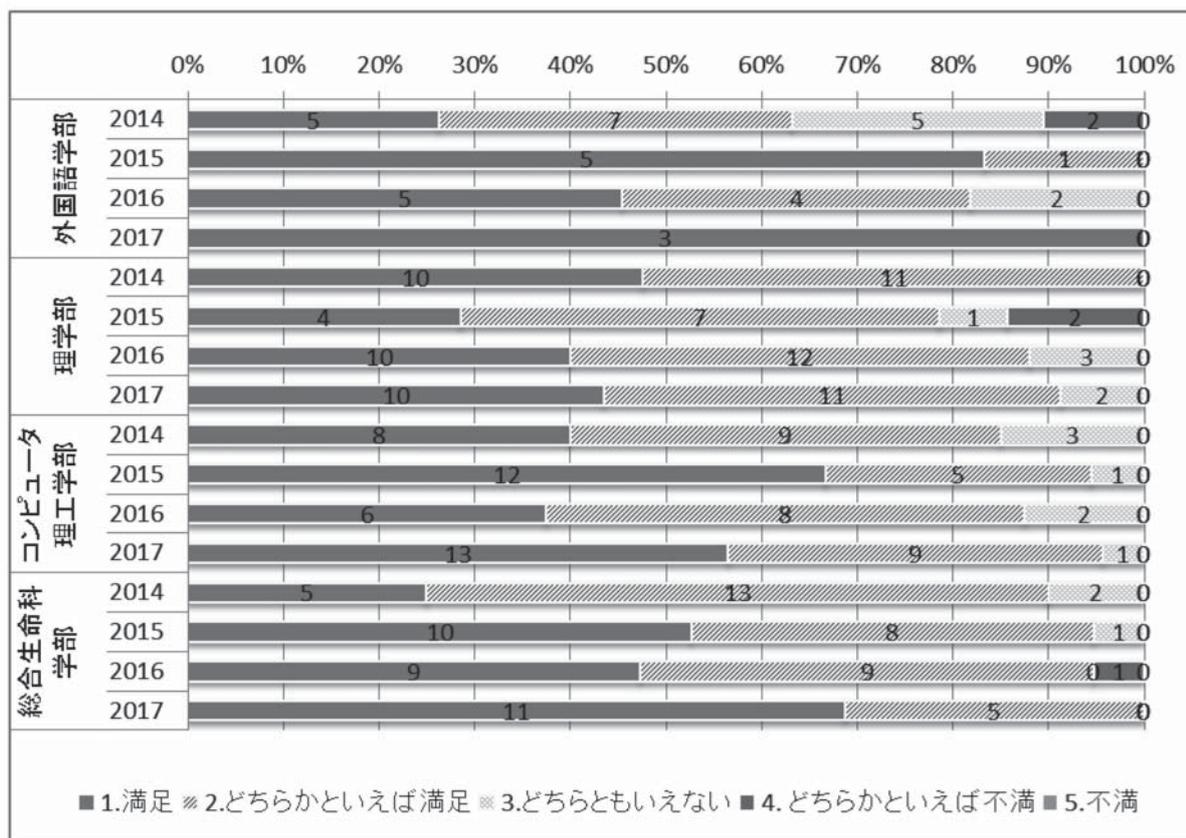


図 1. 事後アンケート設問C：全体の満足度は

3.2. 各プレーヤーの役割

本科目は、科目担当教員と履修学生だけでなく、様々な立場で役割を与えられた教職員・学生がいる。

3.2.1. 外国語学部教員

外国語学部教員は、科目担当教員として授業進行と指導のほとんどを担っており、プログラム全体を統括する教員1名とクラスを受け持つ4名からなる。クラスを英語の苦手な学生のフォローや、グループワークの対応なども行う。授業全体を統括する教員1名と、クラスを受け持つ教員4名の計5名からなる。クラスは、1人の教員に対し約15～20名であり（表1）、すべての学生が手厚い指導を受けられるようにしている。終了後に履修学生にとってアンケートでは参加人数が適正であったかを問うているが、理系3学部では毎年度6割以上が「強くそう思う」「そう思う」という肯定的な回答をしている（図2）。さらに、講師数について十分に多いかを問うたときには、「強くそう思う」「そう思う」を選択した学生が全学部において半数を超えている（図3）。このことから、授業を受けた学生の観点から見ても1クラスあたりの学生数が適切であると推察できる。

表 1. 1クラスあたりの人数

2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
20.2	15.2	17.7	16.2

（単位：人）

3.2.2. 理系教員

理系教員は、理学部・コンピュータ理工学部・総合生命科学部の各学部から1～2名、全体または一部のプログラムに参加し、学生とともに過ごす。理系教員の主な役割は、履修者の中でも特に理系学生のサポートにある。理系教員が直接授業の進行に関わることはないが、学生とともに「履修者」として授業を受ける、あるいは学生に英語で話しかけることにより、理系教員が傍にすることで安心感を与え、彼らが授業に臨めるようにしている。また、課題に取り組んでいる際に、理系教員ならではの視点（理系の学会発表の方式、根拠の提示方法など）で助言することで、最後までサポートする役割を担っている。

もう一つの理系教員の重要な役割として、最終日のプレゼンテーション大会における審査員である。審査は、各学部から合わせて10名近くの理系教員が参加し、その中には学部長も含まれている。1位のグループにはコメントとともに賞状を贈

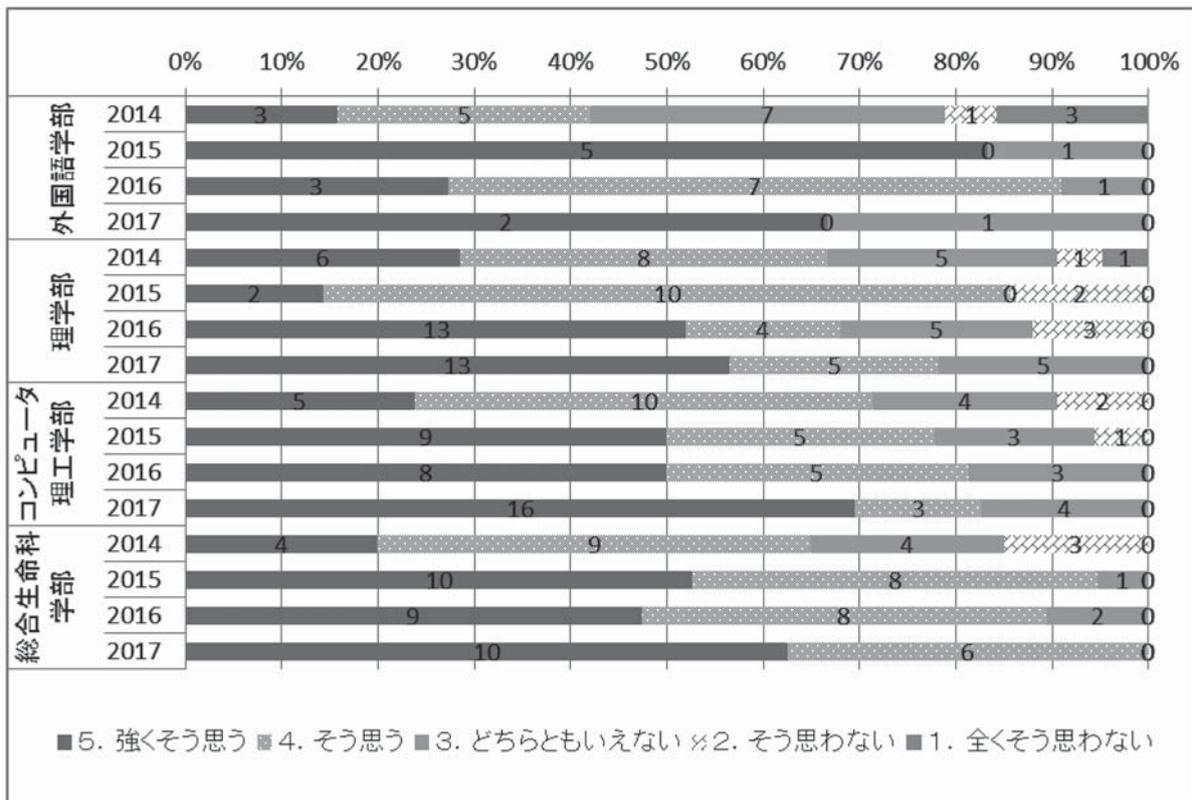


図2. 設問A-7: この授業の参加人数は、適正な範囲だと思う。

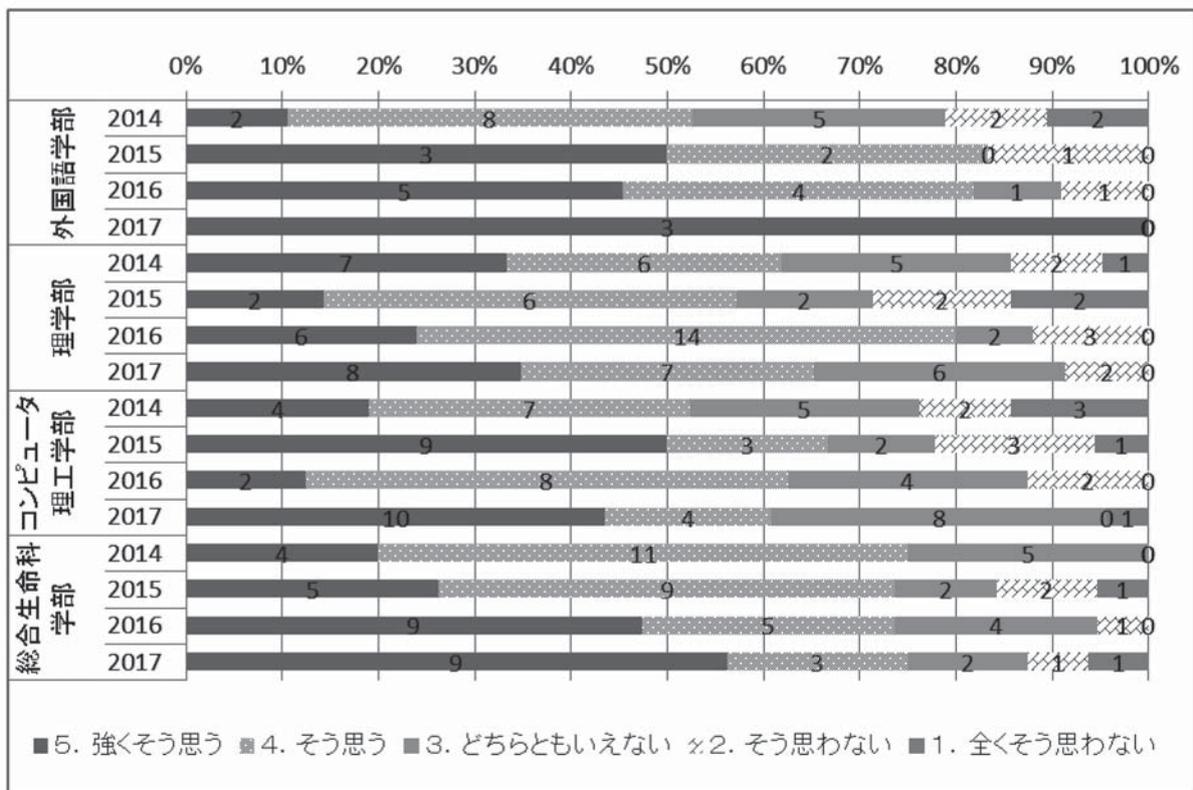


図3. 事後アンケート設問A-8: この授業の講師数は、生徒数に対して十分に多いと思う。

り、学部長はプレゼンターや審査コメントなどの役割を担当し、全体の雰囲気高める。

3.2.3. 学生ファシリテータ

学生ファシリテータの主な役割は、本科目実施の際に必要な教材の準備や教員のサポート、学生のフォローといったTAのような役割が主である。彼らは、「特別英語（英語サマーキャンプ）」過年度履修者であるため、履修学生がどんな面でサポートが必要と感じるかを実感している。学生ファシリテータは科目担当教員と事前に打ち合わせをしており、TAの役割だけでなく「先輩として、後輩のサポートをすること」を伝えている。履修学生からは、「学生ファシリテータとの距離が近くて良かった」という肯定的なコメントが寄せられている。また、学生ファシリテータ自身にとっても、先輩として参加することで新たな学びを得ることがある。履修したときよりも英語力が上がっていることを様々な面で感じ取ることができた学生や、より英語を楽しむことができるようになったという自分自身の成長を感じた学生が多かった。自身の履修経験を活かし後輩にアドバイスを送り、そのグループが賞と取った時の達成感も、貴重な体験であるといえる。学生ファシリテータの多くはGSCで中心的な役割を果たす「GSC学生リーダー会」のメンバーでもあり、科目全体においてリーダーシップを発揮し教員をサポートしている。

3.2.4. 職員

本科目実施にあたり、英語でのコミュニケーションやファシリテーションが可能な職員が授業の実施支援や授業全体の運営支援を行った。職員として関われる部分は英会話の練習相手やプレゼンテーションのアドバイスなど、理系教員や学生ファシリテータと類似した役割であるが、教員や学生に対し英語で自然に話す姿勢を見せることで、「英語のみ」である本科目の雰囲気づくりに少くない役割を果たしているといえる。また、職員が中心となって教職員同士でも英語で話すことで、大人が英語で仕事のことや他愛のない雑談など話している様子を学生が間近で見ることができ

4. 今後の展開や課題

これまで本科目は、外国語学部の教員と理系3学部の教員が検討を重ねて毎年内容に変更を加えてきた。

4.1. プレゼンテーションのテーマ

まず、最終日のプレゼンテーション大会の発表課題である。1年目（平成26年度）と2年目（平成27年度）は、「理想の科学の授業とは」とし、理系の学生が取り組みやすい課題を与えていた。（桜井2015）。しかし、実際に学生に取り組んでもらうと、発表の内容が似通ってしまう、学生が発表準備中に行き詰まってしまうなど、問題がいくつか散見された。また、理系3学部の学生と外国語学部の学生が履修しているため、興味を持つ分野が各々で異なり、全員が議論できるような発表課題をグループ内で見出すことが難しかった。そこで、平成28年度からは「大きな社会問題を解決する小さな、ユニークな、革新的な解決策を提案する」という課題に変更した。学生に、動画投稿サイトにある事例（Volkswagen 2009）を見せ、紹介した事例と同じような社会的な課題を見つけ小さな解決策を提案させた。学生の発表テーマに対する印象は変更前と後では大きく変わらなかったが（図4）、学生の発表内容は変化に富み、発表の仕方やポスターのデザインにも工夫が見られた。

4.2. 実施場所の検討

2つ目に、授業の実施場所を変更したことである。平成26年度においては、学外の宿泊施設において2泊3日で実施した。しかし、実費負担とはいえ科目履修のために約11,000円の参加費用を自己負担しなければいけないこと、また、日本語が全く使えないという環境に対してストレスを感じてしまう学生がおり、学生への負担が大きいことから、翌年度から1日目を学内、2日目と3日目を1泊2日の学外の宿泊施設での合宿形式で行うことになった。これにより、1日目は通い離れたキャンパスの環境の中で学ぶことにより2日以降への合宿の準備を整えられるという効果を狙った。さらに、初日の最後に「日本語で話しても良い時間」をあえて設けることにより、「日本語で言いたかったが言えなかったこと」を履修者同士で確認し合うことができ、副次的な効果として「言葉が通じる楽しさ」を体験することができるようになった。

4.3. プレゼンテーション大会の改善

3つ目は、最終日のプレゼンテーション大会である。大会の評価は、科目担当教員と理系教員で毎年度推敲を重ねた。27年度には、より多くのグループを表彰するため、以下の3種類の賞を設けるようになった（表2）。表彰は、学生のモチ

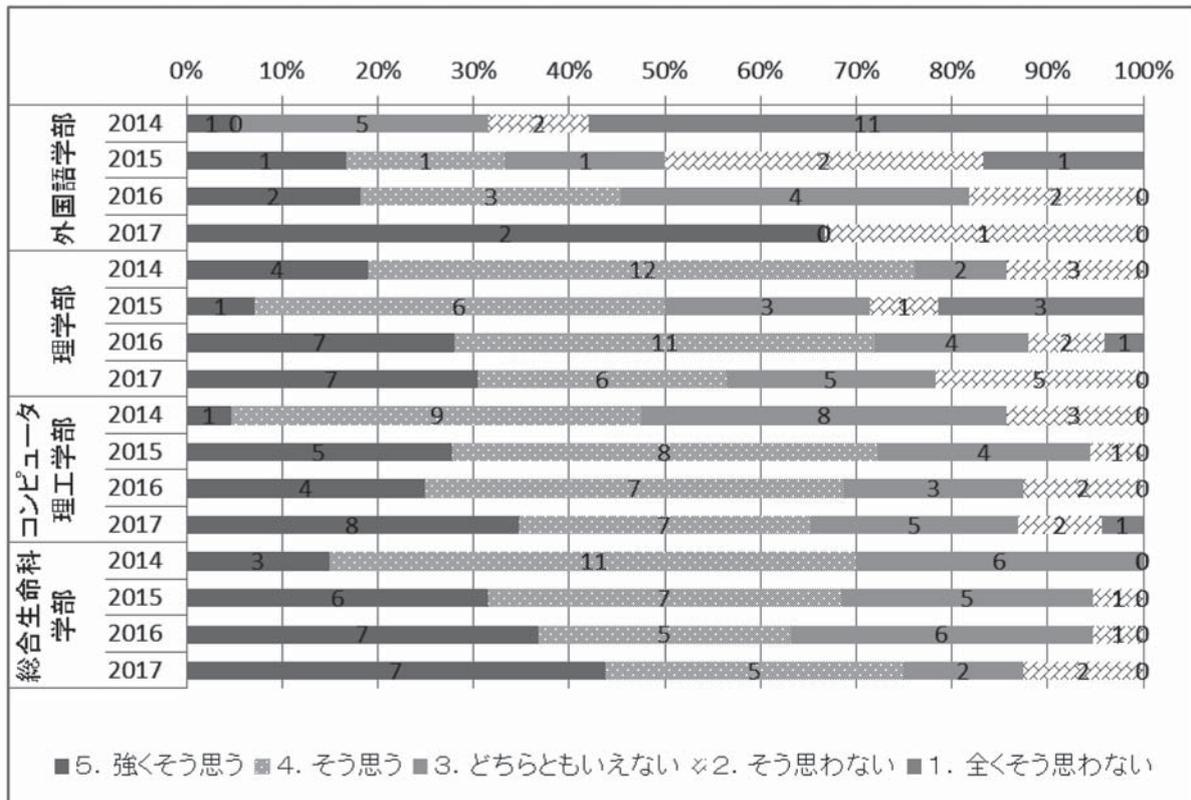


図4. 事後アンケート設問A-2：プレゼンテーションのテーマは、自分にとって身近な話題だった。

バージョン向上が第一の理由だが、授業の中で理系教員の役割を増やすという意図もある。平成26年度は履修者・教員ともすべてのプレゼンテーションを見ることができなかったが、平成27年度以降はタイムテーブルを再検討し、学生・教員どちらもすべてのプレゼンテーションが見られるように変更した。これにより、全てのプレゼンテーションを観た上での評価が可能となった。

表2. プレゼンテーション大会の賞

表彰者	表彰名
理系教員	1位(全員で1グループを選出)
外国語学部教員	特別賞(教員1名につき1つの賞を設定)
学生ファシリテータ	特別賞(全員で1グループを選出)

4.4. 実施日程

4つ目は、実施日程の検討である。日程は、なるべく多く理系教員が最終日のプレゼンテーション大会に来られるように担当教員で検討し、設定している。春学期末に実施しているため、卒業式や学部ガイダンスの日程と重複しないように調整

しているが、年度によっては宿泊施設の予約状況の関係で理想通りの日程で実施できないこともあった。平成30年度は、理系教員の要望により、学部ガイダンスと秋学期開始日の間の期間に実施する方向で調整しているが、引き続き検討している。

4.5. その他の検討事項

先に挙げた4つの変更点以外にも、今後検討すべき課題がある。それは、外国語学部の科目担当教員と理系教員の科目への関わり方である。外国語学部開講科目であるため、外国語学部の科目担当教員が授業の運営を担っている。履修者は理系学生が多数を占めることから、理系教員の関わりは欠かせないものである。しかし、理系教員の関わりがプレゼンテーション大会の審査のみに集中してしまうため、1日目、2日目の授業内での関わり方を検討し、より理系教員と学生の距離が縮まる方法を検討する必要がある。

5. まとめ

本科目は、GSCの必修科目のため、今後のGSCの展開によっては現体制とは異なる形での実施になることも考えられる。しかし、本科目がGSCの

学生にとって貴重な経験であったことはアンケートからも読み取ることができる。次年度は、過去4年間の取組を振り返りつつ、理系教員がより中心的な役割を果たせるような授業計画を検討している。そのためには、外国語学部、理系3学部、関係職員の連携が不可欠である。学生のための学部を超えたコミュニティの形成を、本科目の実施を通じて行う。

謝辞

本稿作成において、「特別英語（英語サマーキャンプ）」のご担当教員の皆様、グローバル・サイエンス・コースに関わる教職員の皆様に多大なご協力を賜りました。深く感謝いたします。

参考文献

伊木貴子（2016）グローバル・サイエンス・コースの週次勉強会における学生の主体的な学び. 高等教育フォーラム 7: pp.103-108
 桜井延子（2015）グローバル人材育成のための合宿型集中講義. 高等教育フォーラム 5: pp.107-120
 Volkswagen (2009) The fun Theory 1 –Piano Staircase. <https://www.youtube.com/watch?v=SBByymar3bds> (accessed 2017.12.15)

付録

「特別英語（英語サマーキャンプ）」 アンケート
 学部： 学生証番号：

氏名：

このアンケートは、今後の授業改善に役立てる目的で実施します。このアンケートは成績には一切関係がありませんので、率直な回答をお願いします。

A. 授業について、あてはまる番号に○をつけてください。

【5. 強くそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない】

授業期間を通じて、英語のコミュニケーション能力が向上した。	5	4	3	2	1
プレゼンテーションのテーマは、自分にとって身近な話題だった。	5	4	3	2	1
グループディスカッションで、積極的に発言した。	5	4	3	2	1
グループワークで、リーダーシップを発揮した。	5	4	3	2	1
グループ内で、協力的に行動できた。	5	4	3	2	1

プレゼンテーションに、積極的に取り組んだ。	5	4	3	2	1
この授業の参加人数は、適正な範囲だと思う。	5	4	3	2	1
この授業の講師数は、生徒数に対して十分に多いと思う。	5	4	3	2	1
他学部の学生とこの授業を受けることは、有益だった。	5	4	3	2	1

B. サマーキャンプを通して、どんな分野の英語力や能力が身に着いたと思いますか。あてはまるものに○をつけてください。（複数回答可）

- a) スピーキング
- b) リスニング
- c) リーディング
- d) ライティング
- e) プレゼンテーション
- f) ポキャブラリー
- g) 論理的思考
- h) リーダーシップ
- i) チームビルディング
- j) 主体性・積極性
- k) 対人性
- l) 規律性
- m) その他（ ）

C. 講義プログラムの形態について、あてはまる番号に○をつけてください。

○宿泊を伴う集中講義形式は

- 1. よいと思う
- 2. まあまあよいと思う
- 3. あまりよくないと思う
- 4. 他の方法がよいと思う（例えばどんな方法がよいですか）

○費用は

- 1. 非常に高い
- 2. 少し高い
- 3. 妥当だと思う。

○全体の満足度は

- 1. 満足
- 2. どちらかといえば満足
- 3. どちらともいえない
- 4. どちらかといえば不満
- 5. 不満

D. 自由記述

この授業について、意見があれば自由に書いてください。回答にあたっては、「良かった」「悪かった」など印象だけを簡単に書くのではなく、「○○○が○○○なので、○○○だと感じた」、「○○○が○○○なので、○○○に改善してほしい」など、できるだけ具体的に書いてください。

- (1) この授業のよい点を、できるだけ詳しく書いてください。
- (2) この授業の改善すべき点をできるだけ詳しく書いてください。
- (3) その他に意見があれば、自由に書いてください。

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

Report of Intensive English Lecture to Foster Globally Active University Students

Takako IGI¹

This article summarizes the English Summer Camp from 2014 to 2017 and reports the results of the evaluation questionnaires.

The English Summer Camp aims to create a community among students in three science-related Faculties and Faculty of Foreign Studies, and also to encourage science students to become confident in communicating in English. The Camp has been offered every year since 2014, and several changes were made to improve the program. These changes include: 1) topic of the presentation, 2) location, 3) evaluation of the presentation competition, and 4) schedule. This Camp is a compulsory subject of Global Science Course (GSC), which is the very first greeting for the GSC students, therefore the Camp plays an important role in the Course. This report also discusses ways in which inter-Faculty collaboration is fostered through participation of science-related faculty members in the Camp.

KEYWORDS: Camp, Intensive English Lecture, Global Science Course, Inter-Faculty Collaboration

2018年1月12日受理

¹ Center for Research and Development for Educational Support, Kyoto Sangyo University

